武者小路実篤選集

第三巻

武者小路実篤選集　第三巻

青銅社版

武者小路実篤選集
第 3 巻
昭和39年5月12日　初版発行

著者　武者小路実篤
発行者　真鍋謙二
本文製版　株式会社欧文社
本文印刷　光邦印刷株式会社
口絵印刷　京橋原色版印刷所
製本　河上製本工場

発行所　図書出版　株式会社　青銅社
東京都新宿区納戸町五番地
電話　二六〇局　八七七一番

定価　六八〇円

Printed in Japan ©

序

僕の選集をまた出すと言う事は気がひけないというわけではないが、しかしまた出したいと言われた事には、嬉しい気がした事は事実だ。僕のものを読みたい人がまだ沢山いてくれる事は喜びである。僕は文学の仕事をする時、自分のような者が文士になって果たしてお役に立てるかどうか、自覚をはっきり持っていたとは言えなかった。しかし人間の本心は人間の本心に通じるものと思っていた。だから自分が本当に感動した事を書けば、読者も感動してくれると思った。そして自分はその時その時、一番真剣になれるものを書くように努力した。そして何よりも正直に本音を吐きたいと思った。

僕は今でも本音を吐きたいと思っている。そして人間に生まれた事を心の底から喜べる人間になりたいと思っている。まだ僕は自分の死に平気と言うところまではゆかないが、この道を歩いてゆけばいいと言う気持はし、それより他は仕方がないと思っている。僕は幸い多くのよき読者

を得られ、感謝している。しかし読者個人々々の要求には僕は応じられない場合が多い。僕は自分の本心を生かしたい。読者からの手紙は僕を喜ばしてくれる場合が多いが、いちいちいろいろの要求には応じられない場合が多い。僕は自分が一心になれる仕事に全力を集中して生きたい。あっちこっちに気分を散漫にしたくない。僕の考えが知りたい人は僕の本に求めてほしい。僕は自分が言葉を通して人間に語っておきたい事はなるべく本に書いておきたいと思っている。僕のかける事は少ないであろう。だが僕は本気になってかける事だけ書きたいと思っている。

昭和三十九年四月二十六日

武者小路実篤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

武者小路実篤選集・第三巻

目次

幸福者　5
友情　137
秀吉と曾呂利　247

桃源にて　277
だるま　303
老彫刻家の道徳心　315
愛と死　321
解説……中川孝

題字・武者小路実篤

幸福者

この書を岸田劉生兄に捧ぐ。

君の芸術に対する尊敬と、

この書にたいする理解に感謝して。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

自分はここに自分の師の一生を書けるだけ書いておこうと思う。自分はこの書が、誰かに見られるか見られないかそれは知らない。またかようなことは書くべきものか、かくべからざるものか、それも知らない。師がいらっしたら、書くなとおっしゃるかも知れない、書けとおっしゃるかも知れないが、しかしともかく自分は書かないではいられない。自分のようなものがかいても始まらないかも知れない。また自分は井のなかの蛙で何も知らない人間だから師のような方はこの世に沢山いるのかも知れない。そして師のおっしゃったことや行なわれたことはそう後世に残すほどのものでないかも知れない。

しかしともかく自分は師によって救われたものだ。師があって自分の一生があるのだ。こんな片田舎で自分が師のような方にお目にかかれたことをどんなに自分は幸福に思っているか知れない。ともかくこの世で師のありがた味を本当に知っているのは自分達わずかだけだ。そして自分がこのことをかかなければ誰も他にかく人はない。自分がかくことによって師のありがた味を少しでも他の人に知らすことが出来、そのことがその人の一生にとって私の上に行なわれたような変化を少しでも行なうことが出来ればその人はきっと私が師のことをかいたことをよろこんでくれるだろう。そういう人がどこかにいる。自分はそれを信じてこの筆をとる。

何からかき出していいか自分にはわからない。自分は師の若い時のことは少しも知らない。師は若い時の話を

されるのをよろこばない。

ある人の話だと若い時に師は女のことでしくじりをして、それから家にいられなくなってとび出して、ああいう生活を始められたのだという。どうしくじられたのかそれは知らない、ともかく師は女を恐れていられたことは事実だ。師はある時こんなことをいわれた。「女を愛するならば本当に愛しなければいけない。自分の運命と女の運命を傷つけることを恐れなければいけない」

すなわちその女と夫婦になれることを本当に知るまでは女の心を動かすようなことをしてはいけない。自分は女を恐れるのは、自分と女の運命を傷つけることを恐れるのだ。それ以上にまた神の教えを傷つけるのを恐れるのだ。それからまた師はある時私にこういった。

それは私が今の妻と結婚しようと思うことを師にうちあけた時だ。師はよろこんでこういわれた。「それはお目出とう。私もそれをのぞんでいた、結婚は早すぎてもいけない、おそすぎてもいけない、無理が一番いけない、自然がいい。結婚したがるのもいけない、さけるのもいけない。来る時が来たら喜んでそれを迎えるがいい。恋はながくはつづかない。それは人生に他にもっと大事な務めがあるからだ、女のことには一日も早く卒業するがいい。だがよろこびは味わえるだけ充分に味わうがいい。だがそれも無理してはいけない、与えられたもので感謝しなければいけない」

自分はその時こういった。「先生は結婚なさったことがおありになるのですか」

「ない。結婚したいと思った時はあるが、私がうっかりしているうちに、相手は他にかたずいてしまった」そして師は大きな声を出して笑われた。

「結婚するのも仕合わせだし、しないのも仕合わせだ、どっちにも人間のよろこびはある。馬鹿なものは独身の

間は結婚した時のよろこびを空想し、結婚すると独身の時のよろこびを空想する。しかしそれは馬鹿だ。水を見た時は水の美しさを感じればいい、花の美しさを見た時はその美しさばかりに気をとられるのが本当の人間だ。どっちでもいい、どっちにも美があり、よろこびがある。春もいいが冬もいい、冬もいいが春もいい。どっちもいい、冬は冬をたのしみ、春は春をたのしむ。かわりがわりに来れば、またそれをたのしめばいい。自分は独身のことを考えると独身もよく、結婚すれば結婚もまたいい、自然に任せておく、無理してはたに迷惑をかけるほどのものではない。お前が結婚すればそれが嬉しい。お前が結婚しなければそれもうれしい。そのために誰をも不幸にしないですめばなおうれしい」

自分はその時、自分の妻を恋している男のことを思い出した。自分はその男を同情することも愛することも出来なかった。そしてかえってその男を淋しくすることにある快感を感じていた。自分はそのことを白状した。師はちょっといやな顔をされたが、すぐ、「それも仕方があるまい。その男がそれから堕落するとも、それはお前のせいではない。それでその男が堕落せずに更によくなったらそのことはかえってその男にとって幸いになる。そうなればなおよろこびだが」

「結婚すると人間は駄目になるものでしょうか」

「そんなことはない、それは失恋すると人間が駄目になるというのと同じ程度の話だ」

自分は余計なことをかきすぎた。ともかく師は常に自分に与えられた運命によろこびを感じて生きていられた。

師は他人にたいして多きを望まれなかった。他人がいいことをすることをよろこばれた、他人の幸福をよろこばれた、それが自分には貴く思えた。そして自分がややもすると他人の幸福を猜(そね)んだり、呪ったりする傾きのあ

るのを情けなく思った。自分は師にそのことを言った。
「それは仕方がない、若いうちは自分もそうだった。この頃は誰より自分が幸福だということを本当に知った。だから他人のことは羨ましくは思わない。自分が他人をしのごうという気がある間、自分が他人に負けるのをいやがる間、そういう根性はなくならない。しかし気にするな。またそう気にも本当はしてはいないだろうが、そしてもっと大きい心を持つようにする方がいい」
師は滅多に怒らない方だった。すべて許す方だった。
「俺は他人をせめることは出来ない、自分の内にはもっと恐ろしいものがあることを反省しないではいられないから。自分の心のけがれを思うのは情けないが、他人の罪に寛大になれるのはうれしい。しかしそのために罪を罪のまま許すようになるのは恐ろしい。自分のわるいことを本当に知っている罪人は自分を正しいと常に思い込んで他人を責める人間よりはずっと幸福だ、その人は神の愛を知ることが出来るから、そしてありがたいとか勿体ないとかいうことを本当に知ることが出来るから。この世に一番救われないものは神にたいして不平をもつ奴だ」
師はまたこんなことをいわれた。
「千ベン悪の種をまいて、悪の芽が出ないことを本当にありがたがるものは、千ベン善の種をまいて、その芽が出ないでも神を呪わない。更に善の種をまこうとする。そしてその芽のいつか出ることを信じて、それを信じることが出来ることによろこびを感じる。そして悪の種をまくことの恐ろしさをますます感じてくる。そういう人間は救われる。人間はある時には神になる。しかしその次ぎの瞬間には最も下等な人間にもなれるものだ。それと同じく最も下等な人間になりきったことを本当に自覚した瞬間に人間は神にもなれるのだ。ある人を善人、あ

る人を悪人ときめるな」

自分はその時師にこう言った。

「しかしこの世には、神になれない人間もあるでしょう。私にはそういう人の方が多すぎるように思えます」

「そういう人はないとはいえない、しかしあるともいえない、そういうことは自分達人間にはいえない。本当に強い真心をもった人の愛の光に照らされてみたら、存外に神になれない人と私達が思いこんでいる人間が神にならないとも限らない。それを知っているものがあれば神だけだ。人間にはわからない」

師は小さい小屋に住んでいられた。その家はある人が師に捧げたのだ。飯の世話は自分達が当番をきめて、うちでつくった飯をはこんだ。自分の仲間は六七人で、かわり番に飯をはこんだ。師は始めは自分で自炊していられた。そして他人の耕作を手つだったり、ある人から貰った僅かの畑を自分でたがやしたりしていられた。自分達が飯を運ぶようになってからは師は自分の土地を近所の一番貧しいものに与えてしまわれた。時々手つだわれることはあったが、一人で方々歩きまわられることが多くなった。師はその時何か大事なことを考えていられるようだった。師が口をついて出る言葉は、多く瞑想から得られた。本も時々はよまれるようだったが、非常な学者というわけにはゆかなかった。耶蘇や、釈迦や、孔子や、ソクラテスを尊敬されていた。しかし本をよむよりは考える方を好まれたらしかった。学者はあまりすかれなかった。自分が生かすことの出来ないほど多くを知りすぎるのは師には害があって益がないように思われた。

師はどんな学者が来ても恐れずに、自分の思うことをしゃべられた。「笑われるのを恐れるよりは心にないことをいうのを恐れなければいけない」

師はそれを実行された。師は心にないことは一言もいわれなかった。むしろ師の心にはいいたいことが多すぎ

た。師の内にある貴い言葉は、出る機会を得ずに、沈黙のうちに葬られた言葉がどんなに多いだろう。またよしその言葉が機会を得てあふれ出たにしろ、その言葉の価値をそのまま受け入れられたことはほとんどないであろう。自分はそれをすまなく思っている。

師はこう言われたことがある。

「福音書は耶蘇のかかれたものではない。ただそこに耶蘇の心からでなければあふれ出ない言葉や行ないが所々に片鱗を見せている。それが実に恐ろしい。その深さとその権威にふれると心が自ずと清まってくる。その前に跪きたくなる。全然とは同感の出来ない言葉があっても、その深さには頭がさがる。その力はどこからくるか。そこが面白いところだ。俺は来世も復活も奇蹟も信じられなくても、耶蘇の心の深さには実に心の底を動かされる。その力はどこからくるか。その力に自分は自分の一生をまかせたい。それだけが自分の一生をささえている心棒だ。それがなければ世の宗教家ほどくだらぬものはない」

師はその力を信じていられた。或る日のことだった。師はひそかに自己の心の内だけで盲目の目を信仰の力でなおそうとされた。そしてそれが失敗した時に、師は泣かれた。「自分は信仰の力で盲目がなおり得るということをまだ信じきっていないのだ。それが信じきれたら、盲目の目もなおらないとは思わない。だが、自分は正直にいうと耶蘇が盲目の目をなおしたということも信じられないのだ」

「それならなぜなおそうとされたのです」

「あまり可哀そうだったから。父と子が五年の間わかれていた、子が五年ぶりで帰って来た、その五年の間に父は盲目になった。父は自分の子供の顔を見たいのをじっとこらえて涙ぐんでいた。子は自分の顔や姿を父に見せられないのをたまらなかった。俺はそれを見ていたらつい父の目をなおしたくなったのだ。だが俺にはその力が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com